慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

令和４年度 三四会定例評議員会開催

令和４年６月11日（土）、信濃町キャンパス東校舎講堂で令和４年度三四会定例評議員会が開催された。今回もCOVID-19蔓延下であることからWEB開催となった。

評議員総数は235名で、委任状提出107名、当日の参加者は現地・リモート参加をあわせて64名であり、評議員会の成立が確認された。評議員会がWEB開催となって3回目であるが、今回は登録されたリモート参加者を当日参加と認め、各議案についてリモートにて賛否を入力することにした。

長倉和彦議長（55回）による開会宣言に続き、令和3年度物故会員123名への黙祷が捧げられた。

審議に先立ち、武田純三三四会長（52回）より挨拶があった。6月10日に予定されていた北里記念式典はCOVID-19のため今年も中止になった。この5月には新病院の完成式が行われ、6月には新病院棟建設に伴う外構工事も完工し、新しい病院正門が完成した。三四会員の皆様の支援に感謝している。また、昨年塾職員と学生に対する新型コロナワクチン接種に協力いただいた三四会員に塾長からの謝辞があったと説明された。三四会百年記念事業として、慶應義塾大学病院・三四会・慶應医学会100年記念シンポジウムが昨年9月に無事開催された。他に三四会百年史を刊行し、名簿も新しいデザインで発行した。今後、三四会の評議員会、理事会の開催、会員の管理など、運営に関して多方面でICT強化に努めたいと述べられた。

三四会奨励賞を受賞した８人の若手研究者たち

第1号議案である令和3年度事業報告が古梶清和副会長（63回）より行われた。会員数は9092名（他大学出身者2931名を含む）であった。他大学出身者の三四会入会が激減しており、昨年はゼロであった。通常の三四会事業に関しては例年通り行われた。三四会百年記念事業で、三者合同シンポジウム、医学部新聞の縮刷版、百年史、記念品の作成が行われた。

連合三田会はWEB開催となったが、卒後50年の会員は日吉キャンパスに招待された。白衣式は行われたが、家族の参加は見送られ、謝恩会は開催されなかった。卒業記念品として特製サーモタンブラーを贈呈したと報告された。

第2号議案である令和3年度会計決算報告が渡辺真純副会長（64回）より行われた。収入は例年と大きな差はなかったが、会費収入は予算をやや上回った。名簿発行年簿発行費用があったが、予算を下回る費用で刊行できた。今年度のみの支出として三四会百年事業があった。シンポジウム開催費用は三者の案分で負担した。記念品等について、持ち出し経費はなかった。

結果として一般会計は約1000万円の赤字となったが、予算案より縮小した。特別会計（赤倉山荘、三四会館建設、医学部援助金）については、大きな変動はなかったと報告された。

第3号議案である財産目録、会計事務処理並びに財産管理監査報告が松本純夫監事（52回）により行われた。会計及び会計以外の業務が、法令および定款に従い適正に行われたと監査報告された。

第1～3号議案について審議が行われた。質疑はなく、議決の結果、原案通り承認された。

第4号議案である令和4年度事業計画（案）が島崎美奈子副会長（61回）より提案された。事業内容は例年通り行われる予定であることの他、COVID-19の影響で2年間開催されていなかった支部会を何らかの形態で開催する予定であること、その他、三四会員の研究ビデオを三四会ホームページ上に掲載する予定であることなどが説明された。また、会員情報管理システムの更新にあたり、多額の費用がかかることから、より効率的なシステムとするよう検討中であると、宮川義隆理事（70回）より説明があった。

第4号議案について審議が行われた。質疑はなく、議決の結果、原案通り承認された。

第5号議案である令和4年度会計予算（案）が渡辺真純副会長（64回）より提案された。収入については、ほぼ例年通りの予算とした。支出は、百年記念関連事業費と名簿関連費用はなくなったが、会員情報管理システムの更新費用として450万円を計上している。黒字予算ではあるが、名簿発行年ではない過去の予算と比べて、黒字幅は縮小していると説明された。

第5号議案に関する審議が行われた。質疑はなく、議決の結果、原案通り承認された。

第6号議案である三四会入会希望者2名について武田純三会長（52回）より提案された。2名の履歴、推薦状の内容について説明があり、理事会ではすでに検討され承認されていると報告された。

第6号議案にについて審議が行われ、質疑はなく、2名の入会が承認された。

審議終了後、金井隆典医学部長（67回）より、医学部の現況と今後の構想について説明があった。昨年、医学部出身の常任理事が3名となったが、医学部を大きく発展させる良い機会であると捉え、一層の努力を重ねていきたい。COVID-19の蔓延下で、研究活動が抑制されていたが、今年は以前のレベルに戻したいと考えている。優秀な学生を集めるためにも、学納金の引き下げを実現し、教育内容も更に充実させたい。また、計画中の健診センターをはじめ、予防医療にも注力したい。慶應義塾医学部が世界を先導できるようになるため懸命に努力するので。三四会員の皆様には引き続き支援をお願いしたいと述べられた。

引き続き松本守雄病院長（65回）より病院の現況について説明があった。この5月16日に新病院棟がグランドオープンしたこと、新病院棟の概要について説明があった。建設事業における募金額は目標を超えて108億円となった。三四会の皆様からの支援に心より感謝している。三四会員のいる医療施設との医療連携を更に進めること、臨床研究中核病院としての活動を一層充実させることなど、今後の抱負が述べられた。

その後、三四会奨励賞の選考過程について説明があり、8人の受賞者に対して表彰式が執り行われた。

星野健副議長（63回）による閉会の挨拶の後、評議員会は閉会となった。

3年続けてのWEB開催だったが、皆様のご協力で無事評議員会を行うことができた。来年は一同に会して開催できるよう心より願っている。

（評議員会議長　長倉和彦　55回）

令和４年度三四会奨励賞受賞者

臨床分野

1．内山　清貴（腎臓内分泌代謝内科学　91回）
「Home-based aerobic exercise and resistance training for severe chronic kidney disease: a randomized controlled trial」

基礎分野

2．紅林　泰（病理学　90回）
「肝細胞癌における腫瘍免疫・血管微小環境の組織病理学的・分子生物学的解析ならびに新規分類の確立」

3．小川　護（眼科学　90相当）
「眼表面の恒常性維持における脂質代謝制御機構の解明」

4．森川　麗（消化器内科学　89相当）
「Role of CC chemokine receptor 9 in the progression of murine and human non-alcoholic steatohepatitis」

5．河合　桃太郎（整形外科学　93回）
「Long-term selective stimulation of transplanted neural stem/progenitor cells for spinal cord injury improves locomotor function」

6．貞廣　威太郎（循環器内科学　86回）
「心臓幹細胞による心臓再生法の開発」

7．村上　紘一（血液内科学　90回）
「A RUNX-CBFβ-driven enhancer directs the Irf8 dose-dependent lineage choice between DCs and monocytes」

8．高野　哲也（生理学　87相当）
「Chemico-genetic discovery of astrocytic control of inhibition in vivo」

第127回生涯教育研修セミナー開催
「免疫異常がもたらす全身性免疫・炎症疾患」

内科学教室（リウマチ・膠原病）教授　金子　祐子（76回）

2022年6月25日に第127回生涯教育研修セミナー「免疫異常がもたらす全身性免疫・炎症疾患」が開催されましたが、総計165名の先生方にご参加頂き大盛況の会となりました。

本来免疫は非自己に対する防御機構ですが、何らかの原因でこの精巧なメカニズムに狂いが生じることがあります。免疫異常を基盤とする全身性疾患は、大きく自己抗体や自己反応性リンパ球が存在する自己免疫疾患と、遺伝子変異を背景として感染や自己免疫不在で炎症をきたす自己炎症疾患に分類されます。近年これら疾患の病態解明が進み、診断・治療など診療が目覚ましく進歩しており、本セミナーでは、日本を代表する3名のエキスパートにご登壇頂いて解説して頂きました。

第一席目は、鈴木勝也先生（内科学教室（リウマチ・膠原病）准教授、75回）より「リウマチ・膠原病診療の進歩」についてご講演頂きました。関節リウマチ、膠原病は全身性自己免疫疾患の代表的難病ですが、各疾患病態で鍵となる炎症性サイトカインや免疫細胞表面抗原を直接的に阻害する抗体医薬や低分子化合物が開発され、患者予後が著明に改善したことをお話し頂きました。最近では寛解を維持しながら薬剤減量や中止が試みられるなど、患者さんに大きな福音をもたらしていることを感じました。

第二席目は、川上純先生（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学共同専攻　リウマチ・膠原病内科学分野教授）から、「成人の自己炎症性疾患の診断・治療・進歩」と題して、新しい疾患概念である自己炎症疾患についてご講演頂きました。自己炎症疾患は遺伝子変異または多型を背景として周期的に発熱する疾患群で、代表格である家族性地中海熱は、16番染色体のMEFV遺伝子のexone10変異が炎症経路インフラマソームを抑制するパイリンに異常をもたらします。日本ではexon10以外の変異による患者が多いこと、IL-6を抑制する抗体医薬が奏効する可能性、そしてmultiomix解析によって自己免疫・自己炎症疾患に対するprecision medicine実現が目前まできていることご教授頂きました。

第三席目は、近藤泰先生（内科学教室（リウマチ・膠原病）助教、88回）から「リウマチ学から見た、COVID-19～コロナウイルス感染、ワクチンと免疫応答～」に関して膠原病とCOVID-19の類似性を免疫反応の観点から説明し、慶應義塾病院では病院一丸となって未曾有のパンデミックと戦い、特に早期からCOVID-19にステロイドや抗サイトカイン薬を積極使用して高い生存率が得られたことをお話しいただきました。また、免疫抑制療法患者におけるワクチンの反応性と副反応およびワクチン間の相違についてもご解説頂きました。

閉会では共催頂いた中外製薬株式会社の奥田修代表取締役から、日本の医薬品開発に対する情熱ととりわけ免疫疾患領域への展開を、また北川雄光常任理事から、非常に急速な進歩を遂げる免疫疾患治療への期待をお話し頂きました。

本セミナーでは、免疫異常がもたらす、かつて不治の病と呼ばれた自己免疫・炎症疾患について歴史から最近の驚くべき進歩について最先端を学ぶことができました。ご講演賜りました3名の先生方、本学関係者の皆様、共催頂きました中外製薬株式会社、ご視聴頂きました先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

鈴木勝也准教授

川上純教授

近藤泰助教

金子祐子教授

慶應義塾大学病院
「医療連携協定契約」のご案内
～地域の皆さまと連携した診療体制の構築を目指しています～

日頃から診療の連携を行っている地域医療機関の先生方に、
当院との「医療連携協力医療機関」になっていただき、
患者さんがかかりつけ医をお探しの際にご案内をしております。

普段の診察や日頃の相談は　医療連携協力医療機関
地域連携
精密検査や専門的治療は　慶應義塾大学病院

※紹介元の医療機関へ再び紹介（逆紹介）も行っています。

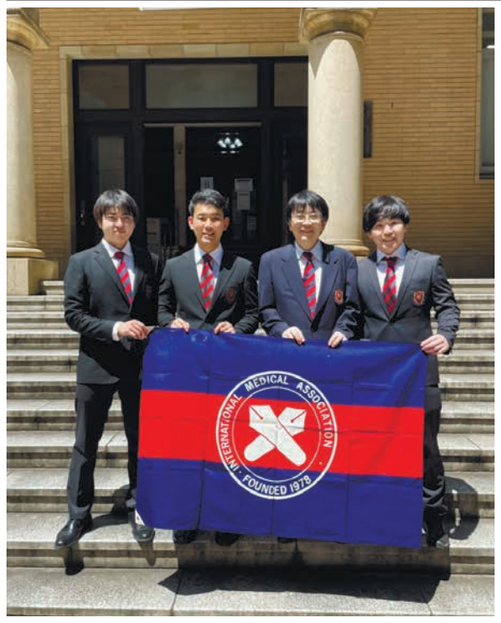
「医療連携協定契約」後の連携内容
●「認定証」の発行　●院内デジタル掲示版に掲載
●当院HP「かかりつけ医検索システム」に掲載
●医療機関向け広報誌の発送
●当院窓口で「かかりつけ医」をお探しの患者さんをお手伝い
●当院主催の医療連携推進フォーラム、セミナー等へご案内

～～是非、ご契約を検討いただければ幸いです ～～

＜本契約のお問い合わせ先＞
慶應義塾大学病院 医療連携推進部『医療連携協定契約』受付窓口
TEL：03-3353-1889　FAX：03-5363-3645
MAIL：iryou-renkei@adst.keio.ac.jp

IMA第44次派遣団
―コロナ禍での38日間の活動記録―

慶應義塾大学医学部国際医学研究会（International Medical Association：IMA）は45年間に渡り、南米を訪ねて「医の原点」を実体験する活動を継続してきた。しかしコロナ禍により海外渡航が叶わず、前例のない状況でIMA第44次派遣団（医学部101回生）は2021年夏、38日間の国内活動を静岡県浜松市、長崎県対馬市、沖縄県粟国島で実施した。団員吉岡佑士郎、佐藤永規、酒井冴南、団長山岸敬幸先生（慶應義塾大学医学部小児科学教室教授）による活動記録を記す。


左から酒井、吉岡、山岸先生、佐藤

日本最大のブラジル人居住都市・浜松市で医療、メンタルヘルスの面から生活を調査するために最初に訪れた山口ハート国際クリニックは、院長が「医療の手が届かない外国人のために」と設立。土日も開業し、スペイン語・ポルトガル語通訳が常駐するなど、外国人患者に寄り添う姿勢には感嘆させられた。ブラジル人学校では、ポルトガル語で感染症についての講演を行った他、児童のメンタルヘルス調査を実施。「言語・アイデンティティの壁」は厚く、将来日本で暮らしたい児童は4割弱という結果に。少子高齢化が進む中、彼らの大きな力を生かすために歩み寄りは欠かせない。

対馬市は面積708キロ平米の大型離島で、長年独自の離島医療政策が実施されてきた。実習先の僻地拠点病院・対馬病院は南北に散在する僻地診療所への医師派遣をする事で、島全体の健康を網羅していた。非専門医師でも褥瘡処置、認知症プライマリケア、小児診察をするなど、総合的に診る医師の姿には驚かされた。人材や機器等の医療資源を適正に配分し医療の全体像を変える仕組みの力を実感した。

粟国島は人口700人弱の離島で、医療者と患者との距離が限りなく近い場所。島民を診る医師はたった一人であり、24時間限られた検査で正確な診療をしなければならない。しかし、資源が限られているからこそ、「患者さんと向き合う」事の大切さを理解できた。独特の死生観が巡る島内では、搬送される中か、島で死を迎えるかは極めて重要な選択。生死の狭間にいる患者の治療方針を考える時、深く患者の価値観を理解し、最適な医療を提供する事がプロフェッショナルであると痛感できた事、将来医師になるものとして大切な宝だ。

コロナ禍であらゆる活動が停止される中、IMAとしての歩みを進められたのは偏に全ての関係者からのご理解があってのことである。活動での経験の全てを糧とし、人を想う心を忘れない医師となりたい。

（吉岡佑士郎　101回）

長崎県対馬市での訪問診療の様子

鑑賞知来

「それ何の意味あるんすか？」

最近の若い医者はよくこんな風にぐちをこぼします。スマートで、無駄がなく、要領がいい。しかもカッコいい。慶應医学部の新人君たちは、まるでアイドルのようです。でも、無駄のなかに、もしかしたら、真理がまぎれこんでいるかもしれない。

わたしが、東電病院の地下で動物実験に汗を流していたころ、失敗の連続で路頭に迷い、研究を放擲しかけたとき、ふと立ち寄った東急ハンズで日用品工作の機械をみかけて、ためしに使ってみたところ、奇跡的に手術が上手くいった経験があります。王道でなく路地裏にいくと道がひらけることだってあるわけです。

たとえばノーベル賞。受賞者には、少年時代、原っぱで泥んこになって駆け回った経験者がとても多いそうです。正攻法だけでは、壁にぶつかることもある。臨床も研究もしかり。いちどは挫折し、惨憺たる結果に陥っても、あきらめない泥臭さ、要領の悪さは、どんな時代の医者にも必要な資質ではないでしょうか。

私はかねがね、SNSをドラえもんのポケットだな、と考えてきました。いまはカンファレンスで凍りついたとしても、図書館にしらべに行く必要はない。語りかければ、その場で、たちまちスマホの小さなポケットが答をお手軽に教えてくれるのです。

早くて正確、おまけに無駄がない。しかもポケットの中味は無限。すばらしいことです。でも、こうした流れが進化なのか退化なのか、私にはわかりません。ただ、要領を追いかけるあまり、タフなことをさけ、無駄をやらず、いなかへの異動も嫌い、地方の関連病院が弱体化するというような傾向は、慶應医学部にとって、あまりいい道行きではないように私には思えます。地方で数十年臨床を続けてきたアナログ医者から、秀才君たちへ一言。

「偏差値」だけではなく、

「変さ値」も大切ですよ。

（稲城市立病院　清水健太郎　70回）